

一渡り、北から南十文字つなごやつはなかたというものに、切り立て追立てあるを幸いに切つて廻る、手元に進む兵二十五人切り伏せ、残る奴原やつばら四方へばつと追つ散らし本陣へ引き返し見てあれば、残り少なに討たれける。いかに寄手の軍兵ども、功成る者の腹切りよう、よく見よ、と言うままに、腹十文字に切り、城に火をかけ煙に紛れて落ち行きける。折節西風激しく吹きければ天も霞と燃え上がる。寄手の者どもこれを見て勝鬨かちどきどつと作り、各々帰陣せられける。

さるほどに、大高相模守康澄は、方々落ち忍び男鹿をさして急ぎける。かの康澄が心の内、無念類なごひはなかりけり。

船越の伏せ勢、男鹿の城合戦の事

さて、船越の伏せ勢、切山落城と見えて火の手雲井に上がるなり。いざや切つて入らんとて追手・搦手からめて、手分けして脇本の城に押し寄する、三方より追つ取り巻き関せきの声をぞ上げにけり。

城の内にもかねて用意の事なれば、家の後見、石岡主典・小野寺権右衛門・加賀太夫・湊北条・松田兵部之助・片岡大平・安東右京氏武を始めとして、そのほか、下莉彦五郎・田中原八・山田喜六・岩瀬孫三郎・堀内与八郎・神田・松原・鶴木・箱井・□川・北の浦・佐藤右近・大江・浜田の者、先として甲のきらを輝かし並び居たり。

かくて関の声も静まれば、大将八柳長門守、駒一陣に乗り出し大声上げて名乗りける、湊九郎殿の討手の大将承り、八柳長門守康頼、新庄石見守定頼罷り向かつて候、早速、城を御渡し候べし、左なくば御首給わらん、と高らかに名乗りける。

その時、石岡、矢倉に掛け上がり、何、御首を給わらんと、天命知らずの愚人原ばつら、あれ、蹴散らせ者ども、と弓押取り散々さんざんに射たりける。これを軍の始めとして両陣互に入り乱れ追いつまくつつ戦いける。されども城は大勢、寄手は小勢なれば引色に弓は見えにける。城の兵これを見て、余すな者ども、打ち取れ、と一度にどつと打手出でければ、寄手の軍兵叶わじと思ひけん、船越さして逃げにけり。城の兵、勝ちに乘じ追ひ掛けるほどに船越川の辺まで押し掛け戦いける。八柳・新庄・三牧九郎・大亀権太郎・三嶋又八、これらの兵ども数を尽くして討たれけり。あるいは船越川に流れ入り、水に溺れ死ぬる者多かりける。

されども二人の大将はその勢百騎ばかりにて今を限りと戦いけれども敵は大勢、味方は無勢の事なれば叶わじと命ありてこそと思ひ、湊をさして落ち行きける。城の兵々勝鬨を作り、本陣さして引き返す。

かくて両大将は漸々命ばかりにて湊へ逃げ帰り一々次第申し上げる。愛吉公、聞こし召し、いかがすべしと、ただ黙念としておわします。